原著

保育者のキャリア形成に関する研究（５）
― 保育所で勤務する看護師のキャリア形成に焦点を当てて ―

浅　井　かおり[1)]・浅　井　拓久也[2)]

Research on Career Development for Childcare Workers (5): Focusing on Career Changes of Nurses Working in Daycare Centers

Kaori Asai[1)] and Takuya Asai[2)]

要　旨

本研究の目的は、病棟で勤務していた看護師が保育所の看護師としてキャリアチェンジした要因及びキャリアチェンジ後のキャリア構築を明らかにするものである。複線径路・等至性モデリング（TEM）を用いて分析を行った。

分析の結果、キャリアチェンジに至った要因については、体調を崩したことがきっかけとなり、転職することを検討し、その中で、保育所で勤務する看護師の職業を知り、健康な子どもの健康管理や維持増進に興味を持ったこと、また、引き続き子どもと関わる仕事がしたいという意思が関係していた。キャリアチェンジ後については、保育所という新しい環境の中で自身に必要な知識やスキルを探り、今まで培ってきた看護知識や実践知に加えて、新たな保育の知識や視点を蓄積しながらキャリアを発展させていったことが明らかとなった。

キーワード：保育者のキャリア形成、看護師、キャリアチェンジ、複線径路・等至性モデリング

1　研究の背景と目的

（1）はじめに

児童福祉施設の設置運営基準等の一部を改正する省令（令和４年厚生労働省令第159号）が令和５年４月１日より施行されている。同省令の第三条の規定により、保育所に勤務する保健師や看護師又は准看護師（この後は看護師等と示す）の配置について、乳児の在籍人数の条件が外され、一定の要件はあるものの看護師等１人に限定し保育士としてみなすことができるようになった（厚生労働省，2022）。

また2024年度から保育所等の保育士の配置基準の見直しを行うため（こども家庭庁，2024）、保育士や保育士としてみなすことのできる看護師等を増員する保育所もあるであろう。

そして、保育所保育指針（厚生労働省，p.16）にも「（中略）栄養士及び看護師等が配置されている場合は、その専門性を生かした対応を図ること」とされているため、健康面や衛生面への専門知識を有する看護師等の必要性は高い。

１）浅井かおり　　東京未来大学保育・教職センター（Tokyo Future University）
２）浅井拓久也　　鎌倉女子大学児童学部（Kamakura Women's University ）

一方で日本看護協会の調査によると、病院に勤務する看護師の離職について「回答病院全体における2022年度の正規雇用看護職員（新規採用者や既卒採用者を含む）の離職率は11.8%、新規採用者の離職率は10.2%、既卒採用者の離職率は16.6%」（日本看護協会，2024,p.9）であったと報告されている。

同協会の「2022年度『ナースセンター登録データに基づく看護職の求職・求人・就職に関する分析』結果」でも、2022年度の看護職における求職者数は96,302人であり、施設種類別の求職就職率では、保育所・幼稚園が1.4%と報告されている（日本看護協会，2023）。

このように看護職の求職先の中には保育所や幼稚園も含まれ、求人側の保育所でも看護師等の活躍の場が広がっているため、保育所看護師の看護知識や専門性の発揮が期待される。

その中で、病院で勤務していた看護師がキャリアチェンジの場として保育所を選択する場合、その要因や新しい環境の中でどのようにキャリアを築いていくのであろうか。

（2）研究の目的

先行研究については、病院に勤務する看護師のキャリア形成や転職に関するものとして、例えば、林・米山（2008）や田中・布施（2015）がある。林・米山（2008）は、「看護職におけるキャリアを成人としての成熟性を基に看護職として継続できることと定義」（同上，p.20）し、キャリア形成における仮説の検証、そして影響する要因を明らかにした。また病院勤務の看護師における転職観については、田中・布施（2015）が、転職観の構成因子を抜き出し命名し、構造を明らかにした。

保育所に勤務する看護師の役割や職務の中での困難感については、例えば、木村・棚町・田中・山口（2006）や片岡・矢野・山﨑（2012）、森田・矢野（2021）がある。木村・棚町・田中・山口（2006）は、保育所に勤務する看護師や保健師、助産師等の有資格者について、求める役割や実情、保育士や保護者の意識を明らかにした。また保育士が看護職者に期待する役割について６つのカテゴリーに分け、「子どもの日常的な健康管理」「健康問題への判断・対応」「専門性を活かした相談役」「専門性を活かした教育的関わり」「子どもの安心感」「専門性を活かした保護者支援」とした（片岡・矢野・山﨑，2012）。更に、臨床経験者の保育所看護職者における職務の困難感やその対処として、森田･矢野（2021）は、困難感及びその対処をカテゴリーに分けて論じていた。

そのため、本研究では病院に勤務していた看護師が保育所の看護師にキャリアチェンジした要因やその後のキャリア構築に焦点を当てることとした。キャリアチェンジした背景や要因、個人の思いを把握し、新たな環境の中で、保育所看護師としてのキャリア構築の過程を明らかにすることを目的とした。

２　調査の方法

（1）研究協力者

都内の認可保育所Ｘ園に勤務する看護師Ａ氏に研究協力を依頼した。

Ａ氏の経歴については、病棟の看護師を約９年勤め、現在の保育所での勤務は６年目である。本研究は、病棟で勤務していたことのある看護師が保育所の看護職へとキャリアチェンジした要因やその後のキャリア構築を明らかにすることを目的としたため、病棟で勤務歴のあるＡ氏に研究協力を依頼した。

（2）データの収集方法

研究に進む前に研究の目的や実施内容、倫理的配慮を説明し、同意書への記名捺印を依頼した。

倫理的配慮については、インタビューは自由意思に基づくもののため、研究の趣旨に同意を得た後にインタビューを開始すること、研究の途中でも研究への辞退を申し出ることができること、またインタビューの途中に何らかの心理的リスクが生じた場合は休憩したり中止したりできることを説明した。

そして研究への同意を得たため、Ａ氏に半構造化

インタビューを実施した。

調査実施日は2024年７月29日、８月26日、11月15日である。まず７月29日に半構造化インタビューを実施し、８月26日は筆者が作成したTEM図をＡ氏と一緒に確認し、内容や言葉の表現方法についての確認や修正を行った。更に11月15日に修正したTEM図を基に、思いや表現のずれがないか、Ａ氏と一緒に再び確認を行った。

本研究は東京未来大学研究倫理審査委員会に承認を得たものである（2024 -005）。

（3）分析方法

本研究では質的研究法の一つである、複線径路・等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：TEM）を用いて分析を行った。

「TEMは，時間を捨象せずプロセスとして人間の発達や人生径路を捉える方法論である」（安田・サトウ，2016, p.45）。「TEM図は，対象への理解を深めるための気づきのツールであり，複雑な人生の時間の流れを，いったん手のひらサイズにすることで把握し，対象者への理解を深めるプレゼンテーションのツールである」（同上，p.31）。

本研究でもＡ氏の４年制大学を卒業後から現在に至るまでの過程をTEM図によって示し「手のひらサイズ」にすることで、Ａ氏がどのように人生を歩みながらキャリアチェンジをしていったのか、キャリアチェンジするに至った選択や決断、分かれ道、思いなどはどのようなものであったのか、キャリア形成の過程に対する理解を深めていった。

TEMを活用し分析を行った先行研究については、例えば、安田・荒川・髙田・木戸・サトウ（2008）や香曽我部・松延（2013）、水島・東田（2023）がある。安田・荒川・髙田・木戸・サトウ（2008，p.181）は、「中絶を選択する未婚の若年女性が何に迷い苦しんでいるのかを，その経験の固有の意味を含めて，周囲の人々が理解できるように，描き出すことを目指し」、TEMを用いて分析を行った。香曽我部・松延（2013）は、「保育者の成長していく具体的様相を時間とプロセスの視点」（同上，p.169）を明らかにするためにTEMを用いて、香曽我部（2012）時のグラウンデッド・セオリー・アプローチによる分析結果との比較を行った。そして水島・東田（2023）は、「地域日本語ボランティアの支援者としての立場と日本語教師としての立場」（同上p.55）にある１名を対象とし、それぞれの立場のキャリア発達について、TEMを用いて分析を行った。

本研究でもＡ氏が人生を歩んでいく中でのキャリアチェンジの場面及びその後のキャリア構築の過程を追う際に、TEMを用いて分析することは効果的な手法であると考えた。

また「TEMでは，対象者数を１人，４±１（３～５）人，９±２（７～11）人のいずれかにすることが推奨されている」（安田・サトウ，2016，p.40）ため、本研究では１名を研究対象とした。

本研究でTEMに用いた概念については、

分岐点（Bifurcation Point:BFP）、等至点（Equifinality Point:EFP）、必須通過点（Obligatory Passage Point:OPP）、両極化した等至点（Polarized Equifinality Point:P-EFP）、社会的方向づけ（Social Direction:SD）、社会的ガイド（Social Guidance:SG）である。

またTEM図における意味付けは表１である。

３　結　果

TEM図は図１の通りである。また次にTEM図における説明を行う。

（1）第１期　小児病棟に勤務するまで

Ａ氏は４年制大学の看護科を卒業した（OPP）後、都内の病院の就職試験を受け、内定が決定した（OPP）。勤務前に配属先の希望として、救急もしくは小児病棟を挙げていた（BFP）。他内定者も小児病棟の希望を出していたと思う（SD）が、病院側の決定（SG）により、Ａ氏は小児病棟の配属となった。

（2）第２期　小児病棟で看護師の専門性を育む時期

大規模な小児科病棟であったため、就職１年目は

表1　本研究でのTEM図内の意味付け

TEMに用いた概念	本研究での意味付け
等至点	・現在
両極化した等至点	・保育の知識や視点の習得なし
分岐点	・救急もしくは小児病棟での勤務配属希望を出した ・まずは体調を整えたいと思った ・転職サイトに登録をし、今までの経歴及び今後も子どもと関わる仕事がしたい、日勤の仕事がよいと相談をした ・自分に出来ることを模索した ・保育士がどのような勉強をし保育士となるのかを知りたいと思い、保育士資格の勉強を始めた
必須通過点	・４年制大学の看護科を卒業した ・病院に内定が決まった ・師長との面談 ・退職意思を伝えた ・病院を退職した ・就職試験を受験した ・就職試験に合格をした ・Ｘ保育所に勤務した
社会的ガイド	・病院側が配属を決定 ・自身の健康を保とうとする気持ち ・転職サイト担当者から、保育所看護師の業務があることを聞いた ・保育や子どもの様子の観察、子どもとの関わり ・研修会や看護師会への参加 ・学びたい思い
社会的方向づけ	・他者の希望 ・10年目まで勤務継続をするか悩む ・クリニックや保健所の求人への誘い ・参考資料や材料が無い ・保育士資格の必要性の無さ

多忙な日々を送った。３歳児以下及び慢性期や急性期、重症患者も病棟で担当する毎日を送り、睡眠時間を削り、プライベートの時間もないくらい勉強をしながら日々の業務を行った。入職した３カ月後には夜勤業務も開始した。また半年後には小児病棟の中でも４歳以上児のチームに配属となり、勉強の日々が続いた。

２年目は引き続き、４歳以上児のチームの配属となり、勉強をしつつも子ども達とはコミュニケーションをとることが出来たため、楽しさを感じながら業務を行った。

３年目は再び、３歳児以下及び慢性期や急性期、重症患者を対応するチームの配属となった。通常の業務に加えて、新人看護師を指導する立場となった。その分、責任も増え、指導する立場として伝え方や指導方法など学ぶことが多かった１年間であった。また途中から、人工呼吸器を装着した患者も担当することになり、対応等についての新たな勉強をする日々を送った。

４年目になると、通常の業務及び新人看護師の指導役に加えて、チームリーダー業務も加わった。チームリーダーを務めることで、病棟全体のことを見るようになり、自身のチームのことだけではなく、他チームの業務や進行具合も把握していた。また何かあった際にすぐ行動できるように、全体を見るように意識していた。途中から再び、４歳以上児のチームに戻り、業務を続けた。

５年目も引き続き、通常業務、新人看護師への指導、チームリーダー業務を行った。その中で、災害支援ナース研修に参加する機会があり、災害派遣について知り、登録を行った。そして災害支援に１日行き、被災者の話を聞いたり、怪我の応急処置をし

たりした。

６年目も引き続き、通常業務、新人看護師の指導、チームリーダー業務を行った。

そして７年目以降は、指導する新人看護師も増えていき、リーダー業務の負担や重症患者の対応などが増えていった。やりがいを感じながらも、自身の体調が徐々に整わなくなっていき、患者への対応に自身のベストが尽くせなくなったと感じた。これではいけないと思い、まずは体調を整えたいと思った（BFP）。自身の体調をまずは整えたいと思う気持ち（SG）と勤続10年目までは頑張ろうとする気持ち（SD）とで葛藤をしたが、悩んだ末に退職を決意した。師長との年に一度の面談（OPP）時に退職の意思を伝え（OPP）、病院を退職した（OPP）。

（3）第３期　移行期

退職後に転職サイトに登録をし、今までの経歴に加えて、今後も子どもと関わる仕事がしたいこと、そして日勤を希望することを転職サイトの担当者に伝え、相談した（BFP）。

転職サイトの担当者から、保育所で勤務する看護師の業務があることを聞く（SG）。クリニックや保健所の求人も紹介された（SD）が、自身でも保育所で勤務する看護師について調べた。調べていくうちに、健康な子どもの健康管理や維持増進についての興味が湧いた。そして紹介されたＸ保育所の就職試験を受け（OPP）、合格し（OPP）、勤務することとなった（OPP）。

（4）第４期　模索期から現在まで

キャリアチェンジ後の１年目は、病棟から保育所への勤務となり、元気な子どもたちが大勢いること、そして走り回る姿に衝撃を受けた。今までとは異なる環境のため、環境に慣れることに必死の１年であった。

１年が経過し２年目には、ここで自分に出来ることは何かと悩み、模索した（BFP）。

保育士が行う日々の保育や子どもの観察、そして子どもとの関わりを通じて（SG）、保育所の様子や保育所に通う子ども達を把握していった。また研修会や自治体主催の看護師会に参加し（SG）、他園の看護師が保育所内で行っている健康教育について知った。勤務先の保育所には健康教育に関する資料や材料は無かった（SD）ため、３年目は研修等で学んだ健康教育を自園でも実施したいと思い、教材準備や作成を始めた。

４年目には教材も仕上がり、はじめての手洗い指導を実施した。教材も作成し健康教育は実施できたものの、日々の保育の様子を観察したり子どもと直接関わったりする中で、保育士が学ぶ保育の知識や健康面の知識内容について知りたいと思った。そして知るのであれば、保育士資格を受けてみようと思い、勉強を始めた（BFP）。自身の保育の知識を学びたいという思い（SG）と保育士資格を取得しなくても勤務は継続できるため（SD）悩んだが、保育の知識を学び、試験も受けることとした。

その後に保育士試験を受験した。９科目中１科目のみ合格点に達しなかったが、諦めることなく、日々の業務や健康教育を行いながら、残りの１科目についても勉強を継続した。そして、次の試験で合格し、後に保育士登録を行った。

６年目は保育の知識も習得したことで、保育士が知っているべき基礎知識について把握できた。

現在は、既習の看護知識や病棟における実践、そしてキャリアチェンジ後に新たに習得した保育の知識を園内の職員研修などに生かしていた。

保育の知識を習得する前は、職員研修時に保育士がすでに学習してきている基礎知識から説明をしていたが、現在は保育士に必要な基礎知識を自身が把握し理解したため、基礎知識を基盤に更に健康面や衛生面の知識が深まるように、研修での説明や資料を工夫していた。つまり、今までは保育士がすでに知っている知識も知らないはずと思い説明していたが、保育の知識をＡ氏が学ぶことで、すでに知っている知識を思い出してもらうような説明をした上で、更に知識として必要だと感じた内容を説明に加える

ことにより、知識が深められるよう工夫をしていた。

４　まとめと今後の課題

病棟で勤務していた看護師が、保育所の看護師として勤務することに至った要因及びキャリアチェンジ後のキャリア構築に焦点を当て分析を行った。その結果、キャリアチェンジをした要因については、きっかけは体調を崩したことではあったが、それが分岐点の１つとなり、保育所で勤務する看護師の職を知り、健康な子どもの健康管理や維持増進に興味を持ったこと、また、引き続き子どもと関わる仕事がしたいという意思が関係していたことが明らかとなった。

キャリアチェンジ後のキャリア構築については、保育所で勤務を継続しながら自身に必要な知識やスキルを探り、既習の看護知識や実践知に加えて、新たな保育の知識や視点を蓄積しながら、自身のキャリアを発展させていったことが明らかとなった。

現在Ａ氏は病棟看護師として培ってきた看護の知識や実践に加えて、新たに習得した保育の知識を活用し、Ｘ保育所の職員研修時に生かしている。

Ａ氏はスキルアップをしながら自身のキャリアを発展させ、加えて保育所の保育士の専門性の向上にも繋がる取り組みを行っていた。これは大いに保育所全体の保育の質の向上にも繋がっていくことであろう。

今後は保育所で勤務する複数の看護師の分析を行い、キャリア構築における共通点や相違点があるのかなど、検討を進めていきたい。

引用参考文献

浅井かおり・浅井拓久也（2023）、「保育者のキャリア形成の過程に関する研究（３）―保育士から幼稚園教諭、幼稚園教諭から保育士への転職理由の比較―、『東京未来大学研究紀要』、第17号.

傳馬淳一郎・中西さやか（2014）、「保育者の早期離職に至るプロセス～ TEM（複線径路・等至性モデル）による分析の試み～」、『名寄市立大学　道北地域研究所年報』、第32号、pp.61-67.

林有学・米山京子（2008）、「看護師におけるキャリア形成およびそれに影響を及ぼす要因」、『日本看護科学会誌』、第28巻、第１号、pp.12-20.

片岡亜沙美・矢野智恵・山﨑美惠子（2012）、「保育士の保育所看護職者への認識と期待する役割」、『高知学園短期大学紀要』、第42号、pp.55-66.

木村留美子・棚町祐子・田中沙季子・山口絵梨子（2006）、「保育園看護識者の役割遂行状況と看護識者に対する保育士・保護者の認識」、『小児保健研究』、第65巻、第５号、pp.643-649.

こども家庭庁（2024）、「こども未来戦略（令和５年12月22日閣議決定）～「こども・子育て支援加速化プラン」関係記載抜粋～」、『第10回幼児期までのこどもの育ち部会　令和６年２月26日　参考資料４』.

厚生労働省（2017）、『保育所保育指針〈平成29年告示〉』、p.16.

厚生労働省（2022）、「児童福祉施設の設備運営基準等の一部を改正する省令（令和４年厚生労働省令第159号）.

公益社団法人日本看護協会（2023）、「2022年度『ナースセンター登録データに基づく看護職の求職・求人・就職に関する分析』結果」、『公益社団法人　日本看護協会　広報部　News Release』、2023年11月14日.

公益社団法人日本看護協会（2024）、「2023年　病院看護実態調査　報告書」、『日本看護協会調査研究報告』、2024年．No.100、p.9

香曽我部琢（2012）、「少子化、過疎化が地方小規模自治体の保育者の成長に与える影響」、『保育学研究』、第50巻、第２号、pp.112-125.

香曽我部琢・松延毅（2013）、「公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティ―グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）と複線径路・等至性モデル（TEM）の比較から―」、『宮城教育大学紀要』、第48巻．pp.167-180.

水島・東田（2023）、「大学で日本語を教えながら地域日本語ボランティアに参加する日本語教師のキャリア形成　大学教員とボランティア支援者としての径路を重ねた分析」、『TEAと質的探求』、第１巻、第１号、pp.55-75.

森田由季・矢野智恵（2021）、「臨床経験のある保育所看護職者の職務上の困難感とその対処」、『高知学園大学・高知学園短期大学紀要』、第51号、pp.11-24.

高丸理香・出雲俊江・橋本嘉代（2020）、「女性労働者の

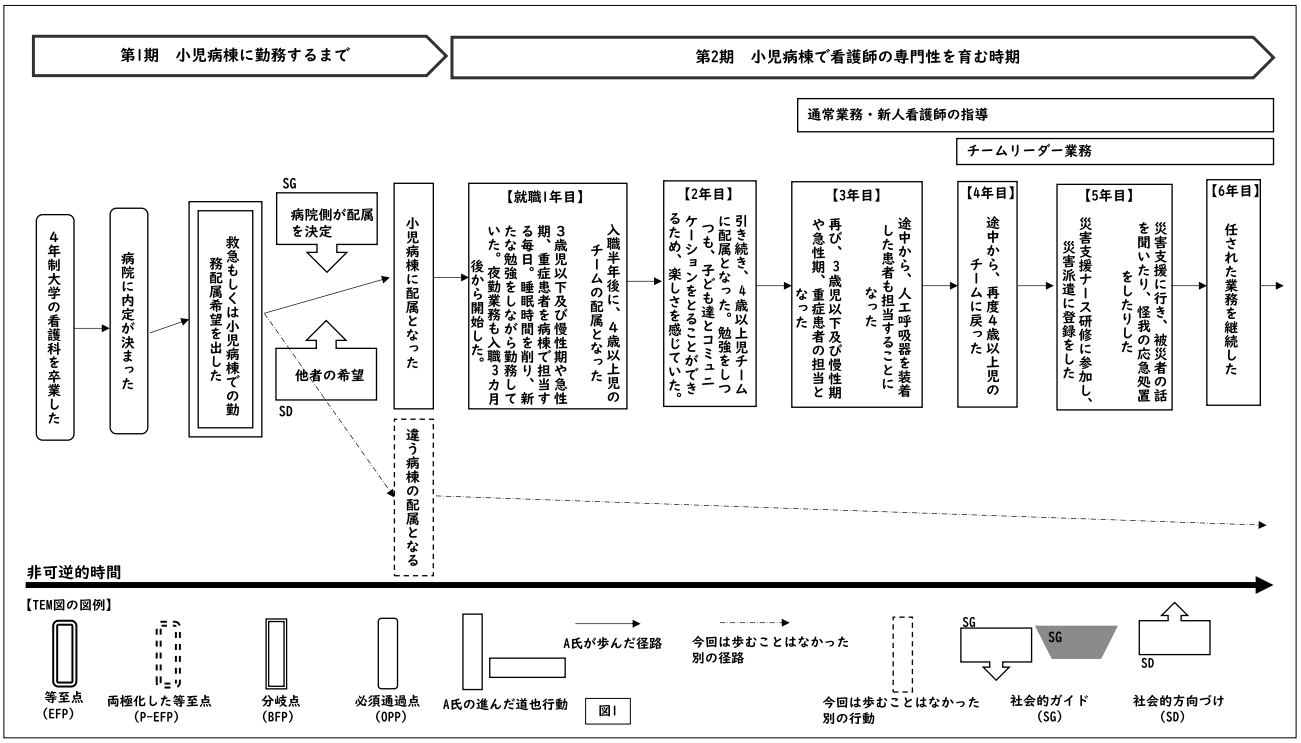
キャリア形成における生存戦略 ―「複線経路・等至性モデル（TEM）」による分析―」、『アジア女性研究』、第29号. pp.21-35.
田中聡美・布施淳子（2015）、「病院に勤務する看護師の転職観の因子構造モデル」、『日本看護研究学会雑誌』、第38巻、第２号、pp.13-22.
安田裕子・荒川歩・髙田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ（2008）、「未婚の若年女性の中絶経験－現実的制約と関係性の中で変化する，多様な径路に着目して」、『質的心理学研究』、第７号. pp.181-203.
安田裕子・サトウタツヤ（2016）、「TEMでわかる人生の径路―質的研究の新展開」、『誠信書房』、p.31. p.40. p.45.

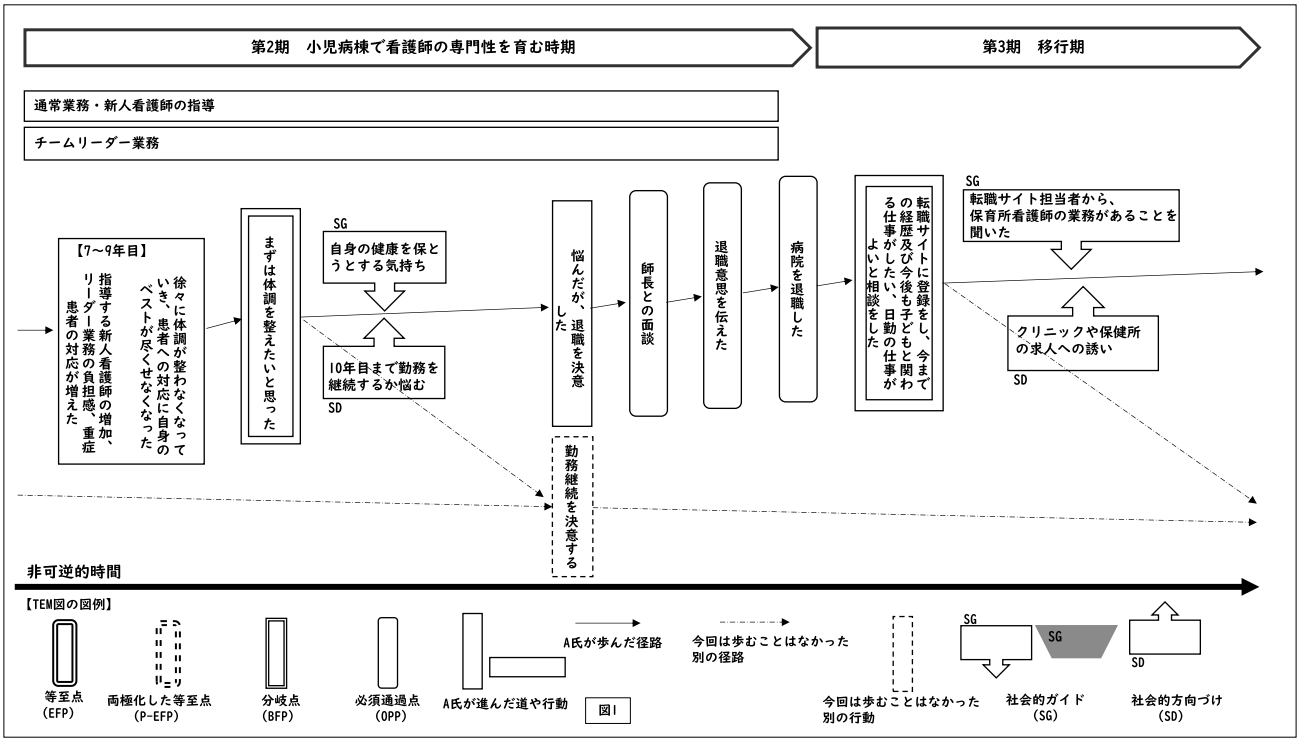
謝辞

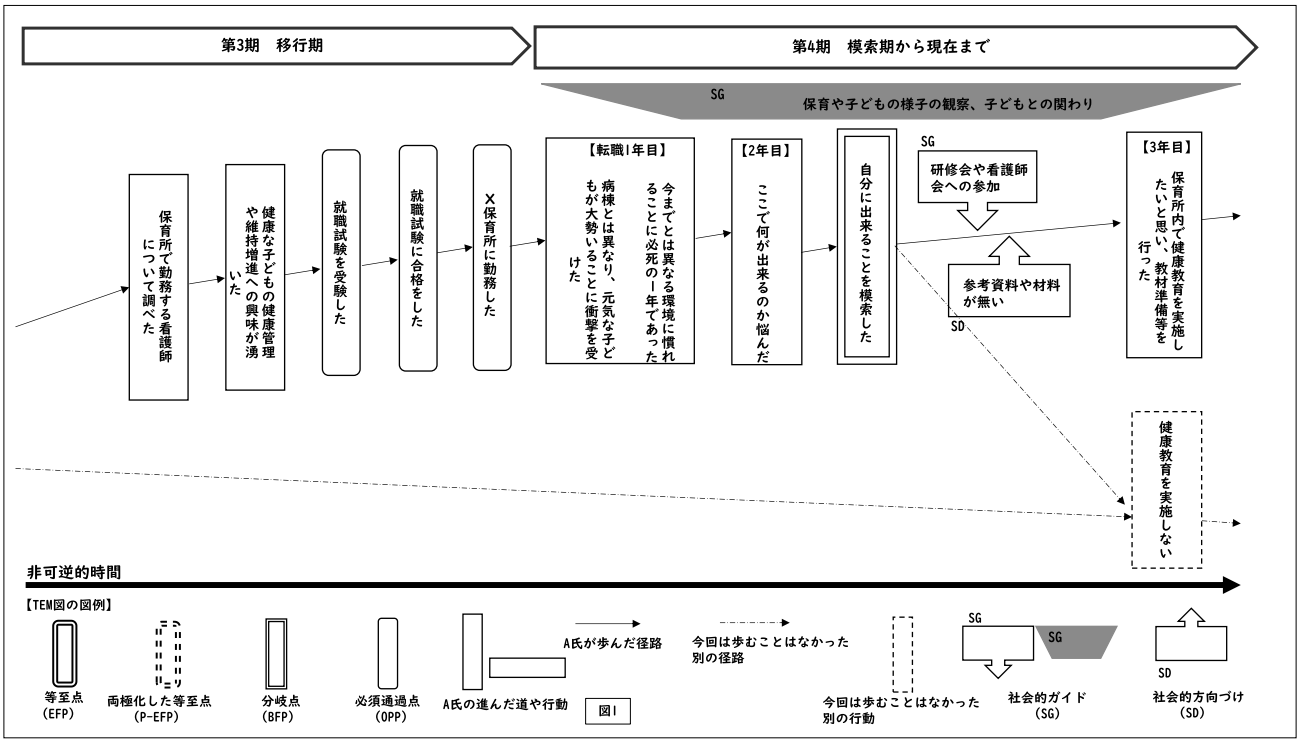
お忙しい日々の業務のなか、研究にご協力をいただきましたA氏に、心よりお礼申し上げます。

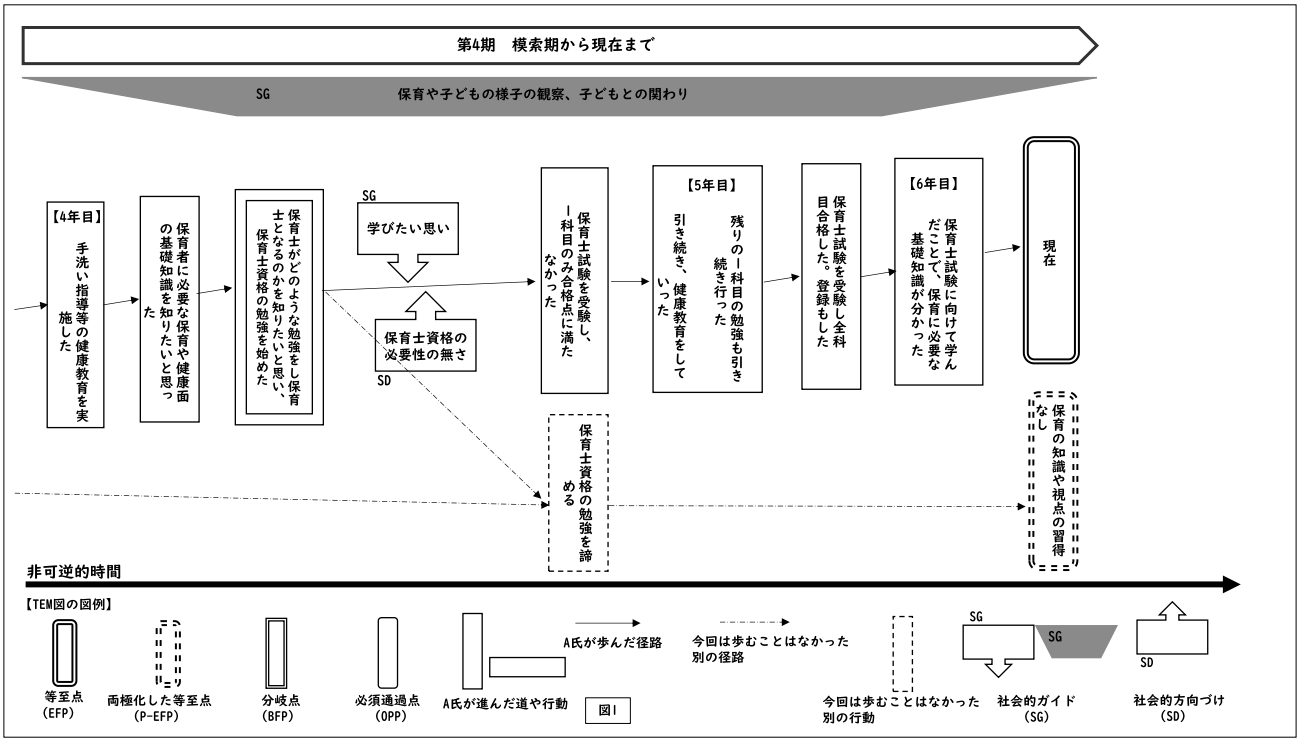
（あさい　かおり・あさい　たくや）

【受理日　2024年11月20日】


第1期　小児病棟に勤務するまで
第2期　小児病棟で看護師の専門性を育む時期
通常業務・新人看護師の指導
チームリーダー業務
4年制大学の看護科を卒業した
病院に内定が決まった
救急もしくは小児病棟での勤務配属希望を出した
SG
病院側が配属を決定
他者の希望
SD
小児病棟に配属となった
違う病棟の配属となる
【就職1年目】
入職半年後に、4歳以上児のチームの配属となった
3歳児以下及び慢性期や急性期、重症患者を病棟で担当する毎日。睡眠時間を削り、新たな勉強をしながら勤務していた。夜勤業務も入職3カ月後から開始した。
【2年目】
引き続き、4歳以上児チームに配属となった。勉強をしつつも、子ども達とコミュニケーションをとることができるため、楽しさを感じていた。
【3年目】
途中から、人工呼吸器を装着した患者も担当することになった
再び、3歳児以下及び慢性期や急性期、重症患者の担当となった
【4年目】
途中から、再度4歳以上児のチームに戻った
【5年目】
災害支援ナース研修に参加し、災害派遣に登録をした
災害支援に行き、被災者の話を聞いたり、怪我の応急処置をしたりした
【6年目】
任された業務を継続した
非可逆的時間
【TEM図の図例】
等至点 (EFP)
両極化した等至点 (P-EFP)
分岐点 (BFP)
必須通過点 (OPP)
A氏の進んだ道也行動
A氏が歩んだ径路
今回は歩むことはなかった別の径路
図1
今回は歩むことはなかった別の行動
SG
社会的ガイド (SG)
SD
社会的方向づけ (SD)


第2期　小児病棟で看護師の専門性を育む時期
第3期　移行期
通常業務・新人看護師の指導
チームリーダー業務
【7～9年目】
徐々に体調が整わなくなっていき、患者への対応に自身のベストが尽くせなくなった
指導する新人看護師の増加、リーダー業務の負担感、重症患者の対応が増えた
まずは体調を整えたいと思った
SG
自身の健康を保とうとする気持ち
10年目まで勤務を継続するか悩む
SD
悩んだが、退職を決意した
勤務継続を決意する
師長との面談
退職意思を伝えた
病院を退職した
転職サイトに登録をし、今までの経歴及び今後も子どもと関わる仕事がしたい、日勤の仕事がよいと相談をした
SG
転職サイト担当者から、保育所看護師の業務があることを聞いた
クリニックや保健所の求人への誘い
SD
非可逆的時間
【TEM図の図例】
等至点 (EFP)
両極化した等至点 (P-EFP)
分岐点 (BFP)
必須通過点 (OPP)
A氏が進んだ道や行動
A氏が歩んだ径路
今回は歩むことはなかった別の径路
図1
今回は歩むことはなかった別の行動
SG
社会的ガイド (SG)
SD
社会的方向づけ (SD)


第3期 移行期
第4期 模索期から現在まで
SG
保育や子どもの様子の観察、子どもとの関わり
保育所で勤務する看護師について調べた
健康な子どもの健康管理や維持増進への興味が湧いた
就職試験を受験した
就職試験に合格をした
×保育所に勤務した
【転職1年目】
病棟とは異なり、元気な子どもが大勢いることに衝撃を受けた
今までとは異なる環境に慣れることに必死の1年であった
【2年目】
ここで何が出来るのか悩んだ
自分に出来ることを模索した
SG
研修会や看護師会への参加
参考資料や材料が無い
SD
【3年目】
保育所内で健康教育を実施したいと思い、教材準備等を行った
健康教育を実施しない
非可逆的時間
【TEM図の図例】
等至点 (EFP)
両極化した等至点 (P-EFP)
分岐点 (BFP)
必須通過点 (OPP)
A氏の進んだ道や行動
A氏が歩んだ径路
今回は歩むことはなかった別の径路
今回は歩むことはなかった別の行動
SG
社会的ガイド (SG)
SD
社会的方向づけ (SD)
図1


第4期 模索期から現在まで
SG
保育や子どもの様子の観察、子どもとの関わり
【4年目】
手洗い指導等の健康教育を実施した
保育者に必要な保育や健康面の基礎知識を知りたいと思った
保育士がどのような勉強をし保育士となるのかを知りたいと思い、保育士資格の勉強を始めた
SG
学びたい思い
保育士資格の必要性の無さ
SD
保育士試験を受験し、1科目のみ合格点に満たなかった
保育士資格の勉強を諦める
【5年目】
残りの1科目の勉強も引き続き行った
引き続き、健康教育をしていった
保育士試験を受験し全科目合格した。登録もした
【6年目】
保育士試験に向けて学んだことで、保育に必要な基礎知識が分かった
現在
保育の知識や視点の習得なし
非可逆的時間
【TEM図の図例】
等至点 (EFP)
両極化した等至点 (P-EFP)
分岐点 (BFP)
必須通過点 (OPP)
A氏の進んだ道や行動
A氏が歩んだ径路
今回は歩むことはなかった別の径路
今回は歩むことはなかった別の行動
SG
社会的ガイド (SG)
SD
社会的方向づけ (SD)
図1